ありがとうｂｊリーグ、コンニチハＢリーグ

地域戦略研究所　杉原正樹

はじめに

2015-2016 シーズンをもって bj リーグは 11 シーズン続いたリーグを閉幕した。地方でのプロチーム設立の道を開き、従来のシステムに風穴を開けたことについては一定の評価が与えられるものである。

島根スサノオマジックはリーグ参入から 6 シーズン、最高成績はウェスタンカンファレンス 3 位、最終シーズンも有明でのファィナルを目指して闘って来たが、残念ながら全国制覇も有明に行くこともできないで終わってしまった。

しかし、島根スサノオマジックの冒険はこれで終わりではない、2016 年 9 月にスタートするＢリーグに舞台を移し新しい章が始まる。2 部からの出発ではあるが、島根の地に巻き起こったプロスポーツの流れは止まるものではない。

そこで、新たに始まる B リーグにおいて、島根スサノオマジックがより発展していくために必要な内容について、プロスポーツチーム設立時に検討した内容を振り返りながら、考えてみた。

1　新リーグの概要

Ｂリーグの概要について特徴的な内容をＢリーグのホームページより以下にまとめてみた。

※詳細についてはＢリーグのホームページ(http://www.bleague.jp/)を参照。

1-1 新リーグの構造

bj リーグは単一リーグを基本として、地区制を敷いての対戦方式であったが、Ｂリーグは、１部、２部からなる階層リーグを基本として、各部ごとに地区制を敷いて対戦する方式である。

1 部及び 2 部は東地区、中地区、西地区の 3 地区、1 地区 6 チームの各部 18 チームで構成される。試合は 60 試合のリーグ戦方式で、内訳は、チームの所属する地区のチームと 6 回戦の 30 試合＋6 試合(任意で選ばれる所属地区内の他の 3 チームと 2 回戦)、他の地区のチームと 2 回戦の 24 試合の合計 60 試合である。

順位の決定の基本は全日程終了後の「勝率」が高いチームが上位となる。

1-2 昇降格の仕組み

B2 のプレーオフは各地区の 1 位チームと、残り 15 チームでの勝率 1 位のチームが出場資格を持ち、トーナメントで順位を決定する。優勝チームが B2 の年間 1 位、準優勝チームが 2 位、三位決定戦で勝ったチームが 3 位となり、年間 1 位と 2 位が B1 へ自動昇格、3 位チームが B1 残留プレーオフの下から 3 番目のチームと入れ替え戦を実施する。

故に、2016-2017 シーズンの島根スサノオマジックは、地区 1 位となりプレーオフの決勝戦進出を最低限の目標となる。

1-3 外国人の出場規定等

外国人選手の登録は、bj 時代と同様の 3 名であるがクオーター毎の出場人数に制限が加えられる。

※B2 での外国人選手出場規定

クォーター	1Q	2Q	3Q	4Q	延長
出場選手数	1 名	2 名	1 名	2 名	2 名

日本人の大型選手の育成を考慮して、外国人の出場枠が設定されたと思われるが、この規定により常時 2 名外国人が出場可能だった昨シーズンのように、大型選手は外国人で手当てするというチーム構成では対応できなくなった。そのため外国人 1 名の時の 2m 前後の大型の日本人選手が必要となり、早速島根スサノオマジックでも 190 ㎝台の選手 2 名を補強した(2016.6.30 現在)

2　スサノオマジックの進む道

bj リーグはリーグレベルを高いとか低いとか言われていても、単一リーグのため当然トップリーグであったが、B リーグでのスタートは 2 部からということになった。

実際成績の良し悪しは観客数に影響する、神話第 3 章でプレーオフ 2 回戦まで進出した翌年の第 4 章では最下位となり観客動員数は落ち込み、その影響を昨シーズンの第 6 章でも引きずっているようであった。故に、1 部で好成績を上げることは重要なことではあるが、一方勝負事であるので勝つときもあれば負ける時もある、それでもお客さんに来てもらえるチームでなくてはならない。

そのためにどうするかをチーム設立運動の原点に返って考えてみたい。

2-1　「お祭り」コンセプト　～バスケット経験者でない人の取り込み～

バスケットボール競技経験者を観客として取り込むのは当然である、しかしそれだけでは限界がある。競技経験のない人をいかに取り込むか、bj リーグはそのことを考えてエンターテインメント性を全面に出していこうとしていた。

島根スサノオマジック設立活動時のプレゼンでも「祭」空間の創出という内容でプロスポーツチームの設立効果をうたっており、新リーグスタートに当たってあらためて原点に返り「祭り」空間の創出によるエンターテインメント性について考える必要がある。

ホームコートの松江市総合体育館も新体育館になり、体育館の内外に十分なスペースが取れるようになったことから、「祭り空間」としてのグレードアップを図ってもらいたい。

その点では、野球場をボールパークとして様々な企画を出している広島カープは参考になるのではないか。野球場でバーベキューをしながら観戦できる場所を設置、球場へ続く道を赤くペイント、球場前のローソンは赤い看板のローソンになり、今年はお化け屋敷も開設するなど非常に興味深い企画を考えている。

2-2　地域貢献としての人材育成

地域密着を標榜するチームとしては、地域に何らかの形で貢献することは最も重要なミッションである。現在、選手が小中学校を回って「夢」を持つ大切さを語り、試合のイベント企画として県内の市町村紹介を実施し、小学生対象のバスケットボールスクールも開設するなど一定の貢献を果たしていると思われるが、今後さらにスクール事業等を充実させることは重要な視点であると考えられる。

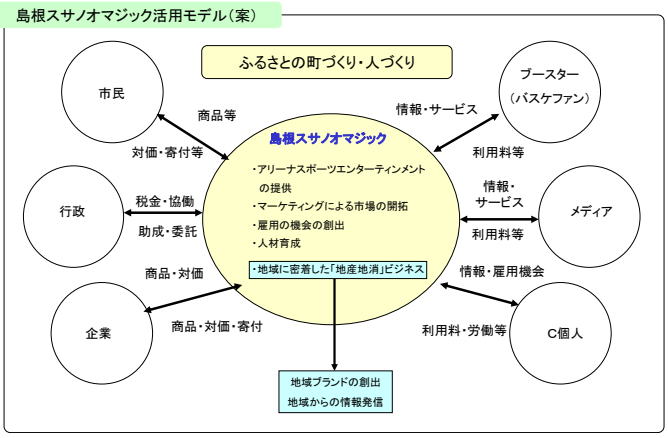
近年バスケットボールでは海外の大学に進学する事例が顕著になってきている。現在日本代表で活躍している渡邊雄太選手は、アメリカのジョージワシントン大学でプレイしており、昨年の高校選手権で活躍した八村塁選手もアメリカの NCCA1 部ゴンザガ大学への進学を決めている。また、有名な奨学制度として「スラムダンク奨学金」があり、志ある若者を支援している。

こうしたことを踏まえて、奨学金制度の設立、海外留学等を想定したカリキュラムをスクール事業に盛り込む等、島根から世界につながる仕組みを島根スサノオマジックが中心となり、産官学を巻き込んで構築していく。さらに、本年からはチアスクールも開設されるがこれを契機にバスケットボールに限らず、MC スクール、スポーツライタースクール、スポーツビジネススクール等を開設する。このような事業により人材育成が軌道にのり、地元チームをはじめ将来 NBA で活躍する地元出身選手が活躍する姿が見られる日が来れば地域貢献の成果となるであろう。

3　コンニチハＢリーグ

2 リーグ並立から統一リーグが始まることになり、日本は世界大会に出場することが可能となった。日本が世界大会に出場できなかった原因は 2 リーグであったことが問題ではなく、リーグ統一を速やかに進められなかった日本のバスケットボール協会のガバナンス力の無さが問題であった。

その問題を「剛腕」川渕氏を会長に据えることで切り抜けた訳であるが、川渕氏が退任した現在、このまま協会の運営が速やかに進んでいくのか興味深いものがある。



新リーグの今後の発展を期待するものではあるが、リーグがどのような展開を示すとしても島根スサノオマジックは、地元に根を張り地域に支持されるチームとして存続していくことを期待するものである。